令和２年度夏季北海道高等学校野球大会南北海道大会小樽支部大会戦績

７月１８日（土）

１回戦　〇 樽水産 ７－０ 樽未創（７回コールド）

対戦校名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
樽未創	0	0	0	0	0	0	0			0
樽水産	1	1	4	1	0	0	×			7

投手ー捕手：寺澤・坂上（６回）・川口（７回）ー岡本

本塁打：本間（４回）　３塁打：佐藤（２回）　２塁打：中越（３回）

初回の守備、先発の寺澤（３年）が相手打線を３者連続三振に仕留め、幸先のよいスタートを切る。その裏の攻撃、四球で出塁した先頭の１番佐渡（３年）を、安打や犠打、犠飛で返し先制する。２回には７番佐藤（３年）の３塁打、３回には６番中越（２年）の２塁打、９番横内（２年）のタイムリー、４回には５番本間（３年）の人生初となる本塁打が飛び出し追加点を挙げ、試合を優位に進める。投げては、寺澤が５回を投げて被安打１、11 奪三振。６回は２番手坂上（３年）が公式戦初登板。７回には主将である川口（３年）が３番手で登板し、捕手岡本（３年）の巧みなリードもあり無失点リレー。７回コールドで勝利した。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、残念ながら春季大会および選手権大会が中止となった。その代替大会として独自に行われた夏季大会。無観客の中で、見事に勝利を飾った。



７月２０日（月）

２回戦　● 樽水産 ５－６x 北照（延長 11 回サヨナラ）

対戦校名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
樽水産	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	1	5
北　照	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	2x	6x

※　大会規定により延長 10 回からタイブレーク

投手－捕手：寺澤－岡本

２塁打：佐渡（３回）・寺澤（６回）・木島（９回）

昨夏、昨秋から３季連続となった北照戦。

初回の攻撃、１死から主将の２番川口（３年）が安打で出塁するも、後続がダブルプレーに打ち取られて３者凡退。裏の守備も３者凡退に抑え、静かな立ち上がりを見せる。２回表の攻撃も３者凡退に終わった直後の２回裏、１死から３連打で１失点。欲しかった先制点を許す。すぐに追いつきたい３回表、先頭の７番佐藤（３年）の安打に四球が絡み無死１・２塁。犠打失敗もあったが、１番佐渡（３年）の２塁打で同点に追いつく。ところが３回裏、安打の走者を犠打・長打で返されて再びリードを許す。４回表の攻撃も３者凡退に終わり、その裏の守備。安打に失策が絡んでさらに１失点。主導権を握られる苦しい展開となる。５回は両者譲らず無得点。何とか２点差で食らいつき、グラウンド整備に入る。流れを変えようと迎えた６回表。先頭の３番寺澤（３年）が２塁打で出塁。４番岡本（３年）の内野ゴロの間に３塁へ進み、５番本間（３年）のセンター前へのタイムリーで１点差に迫る。その裏、１死から２塁打に失策が絡んで２・３塁の大ピンチを迎えるも、後続をピッチャーゴロに打ち取り、挟撃プレーの間にダブルプレーで３アウト。運も味方し、無失点で切り抜ける。一気に流れを引き寄せたいところだったが、続く７回表は下位打線。わずか５球で３者凡退に終わり、再び嫌な展開に。７回裏、案の定、長短打で１失点。またも２点のビハインド。しかし、ここまで何とか最少失点で切り抜ける我慢の野球。迎えた８回表の攻撃は、打順よく１番から。先頭の佐渡が安打で出塁し、２番川口が犠打で送る理想の展開に。３番寺澤のレフト前ヒットの間に、２塁走者の佐渡が一気にホームへ突入するも、相手左翼手の見事なストライク送球でタイミングはアウト。しかし、あきらめず挟撃プレーに持ち込んだ結果、相手の走塁妨害を誘い出し１点差とする。８回裏は、先頭に安打を許すも、後続を打ち取って無失点。よい流れで迎えた９回表。先頭の中越（２年）が安打で出塁。１死後、木島（１年）が振り抜いた打球が右中間を抜け、１塁走者の中越が、両腕を回す３塁コーチャー坂上（３年）を信じて一気にホームイン。土壇場で同点に追いつく。９回裏、失策と２四球で満塁のピンチを迎えるも、何とか無失点で切り抜け、延長戦へ。大会規定によりタイブレークへと突入する。10 回表の攻撃。無死１・２塁から、犠打と四球で１死満塁となり、４番岡本が打席に。絶好のチャンスで、粘った末に放った打球は高々とセンター後方へ。３塁走者がタッグアップし、誰もが１点勝ち越しと思った瞬間、相手中堅手の見事な送球により、クロスプレーで間一髪アウトとなり、３アウトチェンジ。勝ち越すことができず、窮地に追い込まれる。迎えた 10 回裏、同じく無死１・２塁から始まった相手の攻撃は、犠打・四球等で２死満塁。１点取られた時点で試合終了となる場面で、強烈な打球がサードへ。これを何とか捕らえて３塁ベースを踏み３アウト。延長 10 回は両者無得点のまま 11 回へと突入する。10 回の攻撃から一転、強攻策で１死満塁とし、７番佐藤が放った打球は浅いライトフライ。一か八か、３塁走者の寺澤がタッグアップし、全力疾走。快足をとばし、間一髪セーフ。この試合、初めてリードを奪う。しかし、後続が断たれて１点止まり。守り切れば勝利となる 11 回裏の守備。犠打と四球で１死満塁。ここで失策が絡んであえなく同点に追いつかれてしまう。なおも１死満塁でサヨナラの大ピンチ。公式戦初完投となった寺澤が渾身の力で投じた 160 球目が暴投となり、ついに力尽きた。

残念ながら勝利をつかむことはできなかったが、相手と並ぶ 11 安打でチャンスをものにした攻撃、最少失点で粘り強く我慢し続けた守備等、練習の成果を十分に発揮することができた。６年ぶりの南北海道大会出場を達成することはできなかったものの、チームが一丸となり、全力で戦い抜くことができた。